

筑前國風土記 卷之三目錄

福岡

福岡博多は、那珂郡早良郡に屬す。されども城下にて、廣邑なる故に別に記す。

福岡城

福岡町

東照宮松源院

源光院

荒戸山

小鳥警固兩神社吉祥院

鳥飼八幡宮感應院

水鏡天神觀音院

若宮社正全院

圓應寺

少林寺

大長寺

極樂寺

安國寺

金龍寺

長圓寺

淨念寺

德榮寺

勝立寺

香正寺

長福寺

善龍寺

光專寺

安養院

長宮院

簀石

筑前國風土記 卷之三

貝原篤信選定

貝原好古編録

竹田定直校正

○福岡城

城内東丸の西の方石垣の下ひきと處は
早良郡に屬し、東は那珂郡に屬す。城
外は簀子町より西の方は早良郡に屬
し、東は那珂郡に屬す。

慶長五年、黒田長政公、初て此國を領したまひ、其年十二月十一日入國し、先名島の城に住給ふ。名島の城は、天正十五年豊臣秀吉公より、此國を小早川隆景に給りし時、始て築かる。良將の經營せる城にて、要害よければ、長政公の父如水公は、舊に依つて是を居城とすべし。別に城を築かん事は、國の費え民の苦み幾許ならん。何ぞ必改め作らんやと仰せける。されども長政公つらく未然を考へ給ひ、此城境地かたよりて城下せばき故、亂世にはよろしけれ共、

世治りては、久しく國を守るべき地にあらずとて、其由を如水公と相議し、別に城廓によろしかるべき地を、處々見そなはし給ふ。住吉・箱崎、荒戸山など、海河をおびて要害ある地なれば、城を築くべきかと評議し給へど、又よろしからざる事もありて、利害相半せしかば、皆心に叶はずして、終に那珂郡警固村の境内、福崎と云所におゐて、あらたに城地を經營して、山に依て城を築き、堀をほり廻し、郭を構へ、要害堅くし給ふ。慶長六年に、城郭營作の事始ありしが、世既に無事に屬すといへども、大亂の後なれば、猶不意の變もあらんかとして、長政公城郭の造作をいそぎたまひ、みづからはかりいとなみ、長臣と共に日々其功程を察したまひし故、諸臣も庶民も、皆勤めておこたらざりしかば、かほどの城郭、其功速に成れり。頓て郭の内外、諸士大夫の宅門をならべて作り出せり。工商の家も、戸を連ねていちぢくら肆を開き、各其家業を營みなせり。長政公遠きを

やすんじ、近きをなつけたまひしかば、城下の萬民年々に繁昌し、百工月々に來り集まれり。又國中所に、七ヶ所端城を築せらる。上座郡左右良、小石原、夜須郡の彌長、嘉摩の益富、鞍手の鷹取、遠賀の黒崎、若松是也。本城端城ともに、凡七年の間に悉く成就せり。其功極て速なりと云つべし。抑此邑の名を福岡と號せられしは、長政公先祖は、江州佐佐木の一族たりしが、長政公の曾祖父黒田左近大夫高政公、故有て備前國邑久郡福岡の里に移りたまふ。其子下野守重隆も、福岡の産なり。長政公其本を思ひ出して、先祖の住たまひし所の名を用ひて、かく名付たまひしとぞ。唐土の代々の都の名も、多くは其草創の帝王の初住たまひし所を以て名付たり。是本をおもんじ初めをわすれざるの意也。本をかるんじ初めをわするは、仁人孝子の心にあらず。如水公長政公も其本をわすれず、かく大國の主と成給へ共、猶先祖の居所を思ひしたひて、其築ける城に名

付たまふ事、誠に至りて厚き志也。城の西の方、むかしは福崎の汀まで入海ありて、廣き潮入しほの潟地なりしを、此城を築きづるゝとき、是を埋て平地とせば、人力多く費なん。是を用ひて要害とすべしとて、猶其地を掘て、則塘たのいけに用ひらる。今城下の隍ほりに、海魚多きも、始潮入し所なればなり。城の北の方町ある所、又乾の方荒戸、諸士の屋敷など、むかしは入海の潟也かた。中にも荒戸山の下は大船多く泊りける程の深き海なりしが、此城を築きたまひし初、多くの人力を用ひて、やうやく海を埋め、終に平地として、士民の居宅となれり。又城の南方は、赤坂山より本丸の山につゞきて、要害のためあしかりしかば、山をほり切て隍ほりとし、隍の南の山をならして平にす。城内のいぬるに、小高さ山あり。是又本丸より高かりしかば、山をならしてひきゝ岡とし、如水公の兎と裘きうの宅地とせらる。郭くわくわの東は那珂川をかぎり、河中に中島を築て、商家の坊まちとし、中島の東西に、長橋

を二渡して、博多に續けり。又郭の東南に、長隍を
ほる。其東のはしの一區は、鍋島加賀守直茂より、
加勢として人夫を多く援て、隍をほらせらる。故に
今も其所を名付て、肥前隍と云。城の西は、早良河
を以て、外郭そとくわとし、其前百道原ももぢは、むかしより砂原
也しに、小松を植て廣き松原とし、其内に毗伊川ひいあ
り。猶其内に隍二ありて、唐人町の東の隍を以て内
郭とせり。城の北は海、南は山なれば、郭を構ふる
に及ばず。其後年久しくして、城のめぐりの隍、や
うやく泥土流入て淺く成ぬ。光之公の時、公おほやに申て
埋れる泥土をほりのけて、隍をさらへ、水をふかく
せしむ。其惣司、家臣竹森新衛門利實に命せらる。
下奉行の諸士凡十人、延寶元年の冬より事をはじめ、
同七年其功成ぬ。長政公の城下のほりをほらせ給ひ
し時、城の西、鳥飼村のひがし、別業茶屋の石がき
際まで水たゝへ、船にて鳥飼の茶屋に着給ふ。又中
島もありしが、やうやく水あせて、鳥飼の東に近き

所は、草萊くさいの地となる。此時其所をば農民にあたへて新田とし、其東の方隍の西のかぎりに、南北に長き土堤どてをつかせ、唐人町より赤坂田島村の方に行通路となる。是又延寶年中隍をさらへし時の事也。

○福岡町

町數凡二十三町、其郭くわの内にある町は、簀子町、大工町、本町、吳服町、西名島町、東名島町、是他國より城下を通る大道也。都て六町通と云。東西へ通る豎町たて也。又其東に橋口町あり。士の宅なり。是も六町通りにつゞける大道也。傍かたはらにあるは魚町うをの、萬町よろづ、此二町は南北に通す。洲崎町、鍛冶町、西職人町、東職人町、濱はまの町、船町ふね、材木町、此七町は東西に通す。六町通りの北にあり。荒戸新町、横堅吉町、横堅數町有。右は城の東郭の外にあり。

○東照宮 松源院

慶安三年より、先國主忠之公荒戸山を開きて經營し、

東照神君の御祠やしろを建給ふ。三年を経て、承應元年に營作の功成ぬ。其創立の劬勞甚し。是忠之公常に君上を尊崇し給ふ忠厚の至れる故也。同年五月十七日御神體を神殿に納め奉らる。此時毘沙門堂御門跡より、代僧として寂場院と云僧下る。神殿、拜殿、尤美麗なり。玉垣、瑞籬みづかき、神厨かぐりや、廻廊など皆そなはれり。石階高し。御宮の山下に商坊さちや在り。それより御宮の方にゆく廣道ありて、坂をやうやく上り、石階のもとにいたる。其間道遠くしておくものふかく、威靈尊嚴也。畿内諸國の名社の内にも、其地形いかめしき事、類ひすくなし。近村肥饒の地をゑらび、社領三百石餘寄獻せらる。月毎の十七日には、國主みづから參拜したまふ。今に至りて絶ず。此時大夫以下上士等伺候す。御宮の側に、宮司坊を置て、祭禮を執り行はせらる。其寺を福祥寺と號し、山號高照山、院號松源院といふ。天台宗にて叡山の末寺也。叡山より、豪光法印を招き下して、開山とせらる。

貞享三年七月、前國主光之公、石の鳥居を神前に創立したまふ。額の文字は曼珠院竹内良恕法親王の御筆也。

○源 光 院

歡喜山安穩寺と號す。承應二年、前國主忠之公、藥院町の邊に、此寺を創立して、前將軍家光公の靈牌を安置し奉られ、毎月二十日に參拜したまふ。其禮今におゐて廢絶なし。是も近邑肥饒の地にて、寺産三百石寄進せらる。其草創のいとなみいとねんごろにして、殿堂壯麗也。是も天台宗にて叡山の末寺なり。叡山西塔院東谷現光院豪秀法印を招き下して、開山とせらる。然るに寛文八年十月廿日、回祿の災にかゝる。同九年に光之公、始の所は市中に近ければ宜しからずとて、東照宮の西のかたはら傍 荒戸山の麓の谷の中に、御寺を又新に作りて移し奉らる。延寶八年前將軍家綱公薨去したまひて後、其御靈牌をも、此御寺に安置し奉りて、國君月の八日毎に參詣したま

ふ。其儀式、東照宮參拜の例のごとし。

○荒 戸 山

福岡城の乾の方にありて、其間近し。古歌に荒津とよめるは、博多をいへり。されど荒津の崎ともよみ侍れば、博多より此山までの間を、都て荒津と稱するなるべし。此山にのぼりて四方をかへり見たる景色、いつも見るたびに目を驚かし、時々につけて人の心をうごかせり。北海はるか也といへども、地方廣しといへども、唯一望する所の目撃もくげきの中にあり。心飛揚ひやうし、身飄飄ひょうひょうとして、あたかも空中に在が如し。されば秋天のいとさよくほがらかなる日には、名護屋壹岐島など、ほのかに見え渡り、しらぬ新羅しらすも、見ぬ唐土もろこしも、猶其ささにぞ有なんと、はるけき人の國まで、まのあたりに見る心地ぞし侍る。いはんや、志賀の海士の鹽焼く煙、唐泊殘のこの浦にたつしら波、もろこし人の、白沙塗とかける那多の長濱、北に向ひ見えたるは唯庭の前、まがきの間に見るが如し。東

は博多の人烟ひろくにぎはひ、千早振神代に植し箱
崎や、千代の松原は萬古の色を改めず。西には又百
道松原、姪の濱の浦山生の松、長垂山迄松の林長く
海邊に連れり。南には福岡の城目の前にちかく、松
樹のおひ茂れるは、とこしなへに緑をまじへ、千年
の久しきをたもちて、國家のことぶきをなせり。時
鼓のこゑも、折々に聞えて、何となく人の心を驚か
し、おこたりをいましむる心地ぞする。それより猶
も近き麓の里には、宅廣く、おのれく街をなし、
門をならべてつらなれり。家園に多き梅柳は、湖水
のこなたにありて、冬ごもりけるも、むつきの初つ
かたは、江をわたりて春なりと云つべし。猶春ふか
く成ゆくまゝに、紅桃白櫻のさきつゞきて、色をあら
そへるけしき、いと近きながめなれば、ことに目を
よるこばしめて、東風ぬるくふき、そらのけしきゑ
んなる夕つかたは、天も人もともに花にゑへる心地
ぞし侍る。城の西東には千村萬落多く見えわたり、

民のかまどのにぎはへるも、こゝにおゐてかうがへ
見るべし。秋の夜の月の光、海づらの波にかゝやき
わたりて、さながら金蛇の走るがごとし。夕陽のう
すづきて、海に入らんとするけしき東の山にうつり
て、ほのめける返照のよそほひなどこそは、誠に勝
れて、月のさやかなるけはひにも、をさくおとら
じとぞおぼえ侍る。遠近の山、かたくにめぐりつ
らなりて、繪にかきたるよりも見所多く、四時につ
きて、人の目をよろこばしめ侍る。中について、筑
紫にていと高き背振山は、南のかたにそびえて、ひ
たふるに、爰にうちむかひたるごとくにて、見るた
びに先こゝろをとめらる。竈門山又名におへる
たうとき御嶽みたけなり。加也乃山高からずといへども、
其かたちすぐれてめだつべければ、國の諺に、筑紫
の富士といへるも、げにさる事にこそ。春の始つ
かたは、山々の高峯たかねに、去年よりふりつみし深雪ふみの
猶残りて、千里迄も氣色にこめたる霞のうちに、眞

白に見ゆるは、すさまじくも長閑にもおもほゆ。
山々の氣色、霞の晴くもるにつきて、出沒定らず。
朝夕の變態、極りなきながめ也。かうべを四方にめ
ぐらし見るに、目のおよべる所、はなはだ廣くして
ところ／＼の風景かぎりなく、只眼力を以て境界と
して、目をあそばしむるたのしみの多き事、萬戶侯
の富にも、いかでかおとるべき。其上此荒戸山に上れ
ば、塵をたち俗をはなれて、うき世の外に出る心地
ぞし侍る。誠にたぐひすくなき佳境なるべし。天の
橋立、嚴島、和歌浦、竹生島、須磨、明石、吉野、
初瀬など、所々佳境を多く見侍しかど、おそらくは
是にならべかたし。城の南なる大休といふ山も、亦
此景に同じかるべし。此所の景色つたなき筆には、
中々かた端もいひつくしがたければ、筆をとめ侍
る。凡福岡博多は、西國の大都會にて、諸州の商賈
常にこゝに來り、客船多くつどへり。昔は袖の漣あ
りて、唐船も來り止まる程なれば、客船のわづらひ

なし。近代袖の浅あせてうづもれしより、客船をつなぐべき浅なくして、風波のなやみ多く、旅人のわづらひすくなからず。那珂川の下の水口も、亦やうやく沙土あつまりて浅くなり、船をつなぐに所なし。光之公衆人のうれへをうれひたまひ、荒戸山東の麓の海中に石堤ていをつき出して、波頭はととし、其内に客船をととむべしとて、江戸へ申て御ゆるしを蒙り、家臣竹森新右衛門利友利實をさらへし惣司利實が父なりに命じて惣司とし、岡七太夫、大村六郎左衛門、河端二郎右衛門を下奉行とす。諸所にて大石多くこぎよせ、先海底に廣く根盤ねはらを築、其上に石を高くつきあげ、山下より東の海中に横敷間、長さ數町築出せり。萬治二年に始り、寛文元年にいたり、凡三年を経て其功成ぬ。石堤の東の端に、燈籠を常にともし、小吏を置て非常をいましむ。海ふかく港廣く、其内に此國及諸州より來り集れる客船共、常に大小七八十艘、或は百數十艘つなぎといめて、風波のうれひなく、衆人悦あ

へり。是によりて、福岡博多のにぎはひも亦彌増也。國君遠人をやすんじたまへる仁愛の御めぐみ、永世に至る迄、莫大の功なりと云つべし。大坂より西の方、客船の多くあつまる所、兵庫、鞆、赤間關、長崎の外、此れ泊船の多き大港也。又荒戸波頭の石堤の内に、國君の大船をつなぐべき深港を掘せらる。元祿元年二月より初て掘しが、同三年十一月に至りて成ぬ。

○警固大明神 小鳥大明神 吉祥院

小鳥の神社は、いにしへより此所に鎮座し給ふ。城州下加茂の小鳥の社と同神にて、建角たけつのうの身命也。警固の神社、始は福崎の山上にあり。今の城の本丸の地也。社の左に古藤あり。警固藤と云。今も本丸にあり。警固の社のありし南に、若一王子の社あり。是も今に本丸にあり。是警固明神の末社也。慶長六年、長政公福岡の城を築き給はんとて輕營ありし時、警固の社を、しばらく下警固村の山の上に移し給ふ。其

後慶長十三年、藥院町の東の方、小鳥の社のある所に移し、同社にあがめ給ふ。社家者の傳説に、此警固大明神は、日本紀神代上卷に載たる、神直日命、大直日命、八十枉津日命の三神にておはします。當昔伊弉諾尊、橘の櫂が原にて御祓したまひし時、化生し九神の内也といへり。此九神の事は、日本紀神代上卷に見えたれば、爰に詳にしるさず。警固大明神を神直日等の三神とする事は、舊記におゐて所見なし。九神の内六神は住吉志賀にありて、其餘の三神は、在所舊記に見えず。此邊にましますべき理なれば、社家者の云所さもあらんか。又或説に曰、此九はしらの神達、神功皇后異國を討せたまひし時、各神力を添させ給ふ。表筒男、中筒男、底筒男の三神、其和魂は皇后の玉體を守りたまひ、荒魂は御船の先鋒となりたまふ。此三神は住吉大明神是也。表津海童、中津海童、底津海童の三神は、御船の柁を守りたまふ。海路のなやみなからんがためなり。此三神は志賀大明神是也。神直日

大直日、八十枉津日ヤセキツツヒの三神は、軍衆を警固して勝利を得べき事を守らせた給ふ。是當社の三神也。此故に此三神をば、後世に警固大明神と稱すと云。今按るに、警固と名付しは、古此地に警固所ありし故、其所にまします神なれば、名付侍りしにや。神功皇后の新羅を討たまひし時、此神軍衆を警固したまふと云は、其名によりて後の人附會せるなるべし。警固所の事、博多の巻に見えたり。警固を以て神に名付し事は、上代のことばにあらず。小鳥の社は、警固大明神を此所に移してより、このかたは同社に祭り侍る。今此社に祭る所は、三座にして七神也。中座には、警固の三神おはします。左方には、小鳥大明神白山權現を祭る。右方には、神功皇后八幡大神を崇奉る。忠之公の産神也し故、其尊敬殊にあつく、御社の造營もうるはしかりしに、寛文八年十月二十日、市中より火災おこりて、此社も回祿にかゝれり。其後假宮におはせしが、延寛四年に光之君再興したまひ、九

月二日に遷宮あり。かゝりしかば、今もむかしに替らぬ御社也。恒例の祭は、九月十九日にあり。此日御神樂七番、流鏑馬三番、猿樂七番あり。此外年中の小祭數度あり。國君より神領百石寄附したまふ。宮司坊をば中臺山遍照寺吉祥院と號す。開山を尊秀法印と云。始は長州赤間關阿彌陀寺の住持なりしが、長政君の時當國に來りて、此寺を開基せり。神前に石の鳥居あり。額は城州八幡山の僧、惺々翁が筆也。

小鳥明神の事は別に一説あり。那珂郡記下卷藥院村の所に詳也。

○鳥飼八幡宮 感應院

西町にあり。其始は鳥飼村松林の中に鎮座し給ふ。

今も其跡に、神木の松のこれり。

長政公入國の後、鳥飼村に別墅しよをか

まへたまふ。此社其境内にありし故に、慶長十三年今の所に移し奉らる。社家の説にいひ傳ふるは、神功皇后新羅より歸らせたまふ時、十二月四日、姪濱より上らせたまひ、夜に入て鳥飼村に至り給ふ。御扈とに候ひける鳥飼氏の人、夕の御膳を奉る。皇后御

悦斜ならず。今度の一舉は、胎門におはします皇子の御ためなればとて、其おひさきを御祝ひおはしまして、近臣等に、御手づから御盃を給りける。後世其地に御廟を立て、若八幡と號し奉るとなん。御社の中殿には、八幡大神を祝ひ、左には寶滿大神、右には聖母大神鎮座したまふ。側かたはらに彼鳥飼氏の始祖をも祭り侍るとかや。いにしへは神領多かりしと云傳ふ。今に至りて鳥飼村の田の字あざなに、御供田などの名残り。其後村中より三十六石の神田を寄進し、恒例の祭祀をつとめける。又其後、近代亂世の時、それさへなくなりて、九月十九日、かたばかりの祭を執行しが、承應元年、御社の側に宮司の坊を建て、鳥飼山感應院鎮護寺と號す。天台宗の僧住す。神領二十石、忠之公より寄附したまふ。九月十九日には流鏑馬あり。

○水鏡天神 觀音院

福岡の東橋口にあり。九月廿五日祭あり。社家に云

傳るは、菅君太宰府に左遷せられたたまふ時、御船袖の湊に著けるに、船よりあがらせ給ひ、四十川に臨て水鏡を見給ひ、罪なくて咎とがを蒙り給ひける心中の懺念うろねんに、御容かたちのおとろへ給ふ事をなげきたまひぬ。後人此所に御社をたて、水鏡の天神と號す。又容すがた見の天神とも名づけ侍る。四十川のほとりにあれば、四十川の天神とも申す。四十川と名づけしは、其本縁しれず。俗の云所二説あれども、何れも附會せる説にて正證なし。後人を迷はずべければ、こゝに記さず。宮司の坊を松岳山梅教寺觀音院といふ。長政君の時、賴暹せんといふ僧を置て住職とせらる。是此寺の開山也。

○若宮明神 正全院

藥院町にあり。祭る所の神は海神のむすめ豊玉姫也。當昔そのかみは毎年九月十二日に、住吉の神輿此宮迄下らせたまひ、爰に一宿したまふ。明十三日に御歸座あり。祭禮も住吉と同日也。住吉の相殿ふきあはせやのに葺不合尊お

はします。民俗は此神を稱して住吉の母神也と云。若宮と稱するは、住吉大神の御子のやうに聞え侍る。いぶかし。今は住吉の神興わたらせ給ふ事は絶たりといへども、九月十三日にかたばかりの祭禮を執行へり。其社僧の坊舎を、施藥山延壽寺正全院と號す。

○圓應寺 淨土鎮西派

照福山顯光院と云。慶長年中如水公の夫人照福院、始て此寺を創立したまふ。此時開基の僧を、眞譽上人見道和尚といふ。照福院寛永四年八月廿六日行年七十五歳、福岡城中にて身まかりたまひしを、此寺に葬て墳墓あり。故に寺の山號を照福山と云。夫人の靈牌及畫像を安置せり。此寺及豊前國小倉の圓應寺、同國中津の圓應寺、肥前國唐津の教安寺、皆此見道和尚開地する寺也。寛永五年に、國主忠之公より、寺産百石を此寺に寄附したまふ。是其祖母の御寺なる故也。荒戸山に東照宮建立の時、神體を下し給ひ、此寺に假屋を立て、一月餘置奉り、後に荒戸山

にうつし奉る。其假屋の立し所に、小き御社を立て、東照神君を祝ひ奉り、當寺の鎮守とす。

○少 林 寺 淨土宗鎮西派

鍛冶町の西の方にあり。大凉山と號す。初は永長山と云、長政公の夫人を此寺に葬り、法號を大涼院と號す。是よりして大凉山と改む。京都智恩院の末寺也。開山長譽惠順和尚と云。下總國香取郡一分目村いちのわけのの人也。此僧或時綸旨頂戴のため上洛せし折節、遠州天龍川の渡にて長政公に逢ぬ。其人となり常人に異なりしにや。長政の船によびたまひ、對談せられしが、慶長八年六月に當國に下り、同九年四月に寺地を此所に乞請て、佛殿を建立し、昌林寺と號す。後に昌の字を改て、少の字を用ゆ。本尊は彌陀の立像にて、惠心の作也と云。寛永十二年正月十二日、長政公の夫人江戸にて逝去したまふ。遺體をば天徳寺に土葬す。遺髪を下して、此寺に納め、假かりの墓とす。同十三年、忠之公より、百石の寺産を寄附せら

る。台徳院君の御位牌を、忠之公より立置たまふ。
又忠之公の妹榊原式部忠次の内室、寛永二年正月九
日、江戸にて卒し給ひ、天徳寺に葬り、梅雲院と號
しける。其位牌并其假かりの墓も此寺にあり。性雲院と云
子院あり。

○大長寺 淨土宗西山派

心光山雪幹院と號す。東職人町にあり。此寺及淨念
寺は、國中西山派淨土寺の法令を司どる。此寺に、
如水公の父美濃守職隆公法名 宗圓の御位牌及畫像あり。
職隆の墓は、播州姫
路心光寺にあり。初如水公の弟黒田修理則後に薙髮し
て養心と云
其領地那珂郡一瀨村いちのせに職隆の寺を立、心光山正岸寺
と號し、寺産五十石寄附せらる。宗圓公の追號を心
光院と稱する故に山號とす。開基の僧を長徹と云、
豊前中津川より追隨つゝして來る。養心是を請じて住持
とす。養心弃世きの後、其寺を此城下に移さんとす。
時に大長寺の住持文室寂もんじつして、住持なかりし故、一
瀨村の正岸寺の僧を此寺に移し、宗圓の畫像位牌を
も共に大長寺に移し、元和三年、宗圓公三十三回忌

に當れる時、大長寺の山號福生山を改て、心光山と號す。貞享元年八月廿二日、宗圓公の百年忌に、國主光之公より、此寺にて法事を行はせ給ふ。鎌田九郎兵衛昌信、君命を奉て代參をつとむ。光之公は故ありて參詣し給はず。

○極樂寺 淨土宗

鍛冶町の東の方にあり。是によりて此町を極樂寺町と云。此寺初は果還山と稱す。名島にありし寺也。鞍手郡宮田村極樂寺に住せし僧行明上人を、小早川隆景いさゝか歸依したまひしにや。名島に寺を立、本寺の號を用て極樂寺と稱す。長政公福岡に城を築きたまひて後、慶長六年名島より此所に寺をうつせり。其時の住持を天譽上人と云。是を當寺の開山とす。正保二年三月十六日、忠之公の妹松平本稱號池田右近大夫輝興の内室、江戸にて卒したまひ、天徳寺に葬りしが、其位牌を此寺にも立置給ふ。其追號を清光院と稱せし故、此寺の山號を清光山と號す。同年六月、

忠之公より寺産五十石寄附し給ふ。

○安國寺 曹洞宗

大湖山と號す。少林寺の東隣にあり。光明院の御宇
曆應二年、勅に依て、國家の安全を祈らんとため、國
ごとに安國寺を一所づゝ立られ、大般若經を轉讀せ
しむ。此寺は、もと豊前中津に在し安國寺也。長政
公豊前を領したまひし時、此寺の住持を天翁と云、
頗才力ありしにや、如水長政の對遇たいぐ尤あつし。然る
故朝鮮征伐の時も陣僧となり、長政に隨ひ朝鮮に在
陣せり。異邦の人と筆談し書翰往復のためなるべし。
其後長政筑前に移り給ひし時、其思わすれがたくや
思ひけん、跡をしたひて、筑前に來りぬ。如水長政
其志を感じたまひ、寺地を此所に賜り、客殿方丈か
たのごとく結構して、天翁を置たまふ。其上寺産三
百石寄附せらるべきよし仰ありしを、天翁謝して曰、
公恩誠に感謝甚し。然れ共沙門はもと樹下石上に坐
し、一衣一鉢にして道を行する者也。然るに寺富身

ゆたかなれば、おのづから修行おこたり、菩提心も捨りやすしとて、采地を堅く辭しければ、長政公仰けるは、かく利慾をはなれ、法儀を守る所殊勝なり。然らばともかくも其望に任すべし。但軽く扶持を施し、毎日の齋食をたすくべしとて、毎月十口の俸をたまはりける。其後正保年中に、住持全雄狂疾おこりし時、しばらく住持なかりし故、彼毎月十口の扶持も絶てなくなりぬ。寛永十二年十一月廿五日、此寺回祿の災にかゝり、長政公の建給ひし堂舎は焼失たり。其以後忠之公より助成し給ひて、今の堂舎を再興せらる。

○金龍寺 曹洞宗

鳥飼村の北、西町にあり。昔永正五年、原田彈正少弼弘種草創の寺にて、怡土郡高祖村に在。大祖山と號す。くはしくは怡土郡の部にしるす。原田氏世々の墓所彼地にありて、菩提所とす。天正十五年、原田氏當國を去て、肥後國に往し後は、衰微に及べり。慶長十六年、長政公

の家臣高橋伊豆、此寺の檀越だんごつと成り、彼寺を城下に移さん事を吹擧すゐきよして、荒戸山に寺地を給はり、高祖村より寺をうつせり。慶安二年忠之公、荒戸山に東照宮を建立したまふ事始ありし時、鳥飼松原の内に縦七十間・横九十間の地、并もとよりありし松樹ともに給はり、白銀千兩、材木多く恵み給ひ、こぼちし寺院の竹木、碑石、柱礎など、残らず此寺にはこぼせ給りければ、其年の九月今の地に寺をうつせり。此時の住持を察道と云。慶安年中山號を改、耕雲山と號す。塔頭二院あり。慈眼庵、龍潛庵と云。又松風菴あり。今亡。

○長 圓 寺 曹洞宗

此寺もと夜須郡彌長邑に在て、清月寺と號す。黒田兵庫創立する所にして、開山は華溪和尚と云。兵庫法號を清月といひしゆへ、此寺を清月寺と號せり。華溪の弟子宗誕たん和尚は、明光寺再興の住持也。宗誕初遍參して、江府にありし時、忠之公の御母大涼院君、その才を奇稱したまひ、學問をつとめ、筑前に下

り、一寺を建立すべきよし命せらる。其後勸學し功成りて、生雄しやういゆう和尚と號し、筑前に下る。事は博多明光寺の條下に詳也。

此時忠之公より、出世すべきよし命を蒙りしかども、住持の僧にあらざれば、出世叶はず。故に忠之公より、一寺を建立すべきよしにて、寺號を賜はりて、長圓寺といふ。是に依て、宗誕上京して、官家を頼て奏達しければ、能州總持寺の末寺、長圓寺の住持の號をたまはる。其師華溪和尚の開基せる夜須郡清月寺を移して、警固村の南の山上に一寺を草創し、清月の號を改めて長圓寺と號す。故に華溪和尚の位牌及創立の檀那黒田兵庫、并其室の位牌石碑も此寺にあり。宗誕此寺の山號を定めん事を思ひける夜、夢に青龍を見る。因て奇瑞なりとして青龍山と號す。宗誕は其後明光寺を再興して、彼寺に住持す。此時大涼院君より賜りし保科彈正殿の遺骨を、明光寺に埋の葬りて墳墓となし、彈正殿御夫婦の位牌をも安置す。又大涼院君の御斷髪をも明光寺に埋めて、

其標しるしとす。長圓寺は大寺にあらざれば、遠國に本寺ある事便ならざるに依て、今は明光寺に屬す。事は明光寺の條下に詳也。正保三年忠之公の命有て、藥院の南の端に、今の寺地を賜りて、警固村の南の山上より寺を移せり。

○淨念寺 淨土宗西山派

海龍山清照院と號す。開山桂空舜道と稱す。慶長五年寂す。此寺及大長寺は、國中淨土宗西山派の號令を掌る。寺内に照福院殿の御弟櫛橋宗雪墓あり。

○徳榮寺 眞宗西本願寺派

龍湖山と云。慶長六年に光心といへる僧、此寺を開基せり。大工町にあり。光心は生國播州の人にて、此僧を如水公、長政公もとより知給ひし故、跡を慕ひて豊州に來り、其後又筑前に來れり。光心播州の僧なりしゆへ、時の人此寺を播磨道場といへり。寛永十二年、忠之公命じて、此寺に安藤帶刀直次の靈牌を安置し、香華を供へさせらる。直次初は東照神君に仕へて、後に紀州の附庸ふようとなれり。長政公在世の

とき、直次に忠之公の事を懇に頼置たまふ故、其舊きう要えうの言を忘れず、尾州の附庸成瀬隼人正正虎とおなじく、平生忠之公に懇切なりし故、忠之公其志を感じ、此寺に靈牌を置てまつられけるとなり。

○勝立寺 日蓮宗

正興山と號す。福岡の東の外郭そとくわわ、博多口の門内にあり。此寺の開山を唯心院日忠といふ。京都妙覺寺の僧にて、法を廣めんがために、此國に下りけり。慶長八年四月廿五日、博多妙典寺において、日忠と耶蘇やその僧あるまんと、宗旨の優劣を論じ、問答に及び、日忠あらそひ勝ける故、長政公感じたまひ、耶蘇が居たりし寺地を給はり、此所に梵刹ほんせつを建させ、宗論勝て立たる寺なればとて、勝立寺と號を給りける。此時迄は、耶蘇の御制禁きんいまだ嚴きびしからずして、彼が寺まれに在しとかや。池田右近大夫輝興の次子、吉兵衛政成の墓あり、明曆三年丁酉二月十七日に卒せられしを、此寺に葬る。丁岳院春雪日正と號す。

忠之公の外姪也。

○香正寺 日蓮宗

長光山と號す。藥院町より岩戸の道に出る南の出口にあり。開山を日延と云。朝鮮國の産也。朝鮮征伐の時、囚とらはれと成て來り、當國に住す。日蓮宗の僧となり、房州誕生寺に住持たり。此僧不受不施の宗義をかたく守り、公儀の御施物を受ざりし科とがによりて、此國に流さる。其類凡七人ありしとかや。寛永九年此寺を創立せり。清涼院と云
子院あり。

○長福寺 日蓮宗

岡徳山と號す。荒戸西町にあり。京都妙顯寺に屬す。此寺初豊前國にあり。長政公豊前を領したまひし時、此寺の住持日圓を、度々召寄せられ、講説をも聞給ふ。長政公筑前へ入國の後、跡をしたひて此國に來れり。もとより久しく知たまふ僧なる故、福岡材木町に地を賜りて、慶長六年に長福寺を草創す。故に日圓を以て、此寺の開山とす。其後日照といふ僧、

寺内の狭小なる事をうれへ、國君に申て、西町の地を乞うけ、寛文十一年に今の所に寺をうつせり。

○善龍寺 眞宗東本願寺派

瑞雲山と號す。唐人町にあり。寛永四年、如水公の夫人卒し給ふとき、此地にて火葬を執行はる。故に此所を民家とせじとて、藥院光專寺開山の僧淨徳、早良郡そはら魚原村の寺に住せしに、米穀を給はり、此所にうつさる。然故に照福院君の位牌は、圓應寺にあれども、此寺にも位牌を安置せり。

○光專寺 眞宗

開基の僧淨徳、慶長年中に此寺を創立す。寛永十五年、光之君の御母公の弟、新見太郎兵衛を此寺に葬る。其後國君より毎年米三十苞を施したまふ。今に至りてたえず。

○安養院 淨土宗鎮西派

香白山受樂寺と號す。開基の僧心譽は、朝鮮國てらら全羅道香白山安養院の住僧なりしが、文祿の比、長政公の

家臣・池田九郎兵衛が爲に囚とらはれて、日本に渡る。九郎兵衛是を家僕となして使ふ。肉食せず。九郎兵衛彼が志をうばひて還俗させんために、家婢かひを忍らび彼僧の妻とす。然れども二年犯さず。妻謝して離別す。其後九郎兵衛彼僧の志のうばふべからざるをしりて、藥院に草菴を結て、彼僧を置けり。朝鮮にて居たる所の寺の名を取て、安養院と號す。朝鮮人のとらはれと成て、此地に來り住せし者、多くは此等に葬る。故に朝鮮人の墓多し。心譽朝鮮より持來りし佛舍利、并佛書一冊今にあり。第二世を春才と云、頗儒書を讀り。兒童來り學ぶ。其後承應二年國主忠之公の時、源光院を其地に立給はんため、此寺を轉てんじて、藥院の南庄村の内今の境地に移さる。

○長 宮 院

磐石山城圓寺と號す。城の北隍の側にあり。むかしは士人の宅也しが、凶宅なりとて、是に居る人なくして、廢宅となれり。寛永年中、肥後國より來れる

清識と云ふ眞言僧、此宅に寺を立んよしを願ひしかば、國主忠之公是をあたへたまふ。觀音堂を立、菴を結びて住す。元祿十年今の住僧舜覺、觀音堂を改め作る。本尊觀音は弘法の作と云傳ふ。脇立の觀音凡三十三軀あり。

○寶すのこ石いし

簀子町の北海中に大なる岩あり。潮干にはあらはれ見ゆる。簀子石といふ。又魚の町のおき二町程にも大岩あり。是を大築石おほづくしと云。此石よりつゞきて、城の隍ほりの側かたはらの寺、長宮院の護摩堂の下、及城の隍の内東南に大石あり。此三所の大石、土中は皆一石にてつづけりと云。

右に記す外、福岡城下所在寺名

養源寺

大悲山法壽院、天台宗屬松源院。
在新大工町。觀音堂あり。

圓通寺

都史山龍華院、眞言宗屬仁和寺。
在藥院下。辯才天堂あり。

威徳院

屬吉祥院。

常樂寺

同上。

吉祥寺

天龍山と號す。禪宗洞家。在唐人町。遠賀郡若松吉祥寺に屬す。

成道寺

八相山正樹院、淨土宗鎮西派。下同。在所同上。知恩院に屬す。

長性寺

松本山高岸院、藥院南にあり。少林寺に屬す。

大圓寺

鏡智山慈眼院、荒戸後濱にあり。圓應寺に屬す。下同。

盛福寺

楊柳山不遠院、藥院の南にあり。

正光寺

金壽山地藏院、荒戸後濱に在。箱崎一光寺に屬す。

眞福寺

無靈山、眞宗。下同。西町の濱にあり。屬四本願寺。

正覺寺

海見山。荒戸新町にあり。

法傳寺

惠日山。在所同上。

萬正寺

材木町にあり。

長德寺

名島山。東職人町にあり。

明蓮寺

金谷山。材木町にあり。

專立寺

法光山。春吉町にあり。

光圓寺

一江山。博多萬行寺に屬す。鍛冶町にあり。

正法寺

林華山德榮寺に屬す。下同。簀子町にあり。

源正寺

一通山。西町にあり。

淨滿寺

塵即山。在所同上。

建立寺 四王山。春吉町にあり。

妙泉寺 梅花山。光尊寺に屬す。下同。在藥院。

圓正寺 葆光山。鍛冶町にあり。

妙德寺 柳光山。在所同上。

傳照寺 青雲山。屬春吉尊立寺。西町にあり。

以上眞宗西派。此外二區。其一屬明蓮寺。其一屬光圓寺。並無寺號。

此外法泉寺 屬西本願寺。在藥院南。正光寺 屬萬行寺。在春吉。

淨慶寺 至徳山。眞宗、屬東本願寺。下同。在荒戸唐人町。

蓮正寺 車輪山。在荒戸西町。

圓德寺 滿海山。在所同上。

勝善寺 在所同上。

妙法寺 啓運山龍雲院、法華宗、屬京都本法寺。
哲戸唐人町にあり。

妙安寺 海福山常樂院、法華宗、屬香正寺。在所同上。

右の外觀音堂一字新町にあり。

筑前國續風土記卷之二終